表紙モノ語り

サマルカンドの女性の部屋

民族：ウズベク
地域：中央アジア
1982年製作、標本番号:H105531

加藤九祚（かとうきゅうぞう）
民博　名誉教授

中央・北アジア展示に再現されたこの部屋は、サマルカンドにあった住居の一部である。実際に展示場へ足を運んだ際には、近くにある「タシケントの民家」模型とあわせて見て欲しい。同じオアシス都市の住居としての特徴がよく見てとれる。外の通りとは厚い粘土の壁で仕切られ、入口は木の扉。中庭を囲むように部屋が並んでいる。

住居の中は「タシカリ（外）」とよばれる男性の部屋、「イチカリ（内）」とよばれる女性の部屋、「メフモンホナ」とよばれる客間の3つにわかれる。かつては来客にも女性は顔を見せずイチカリ＝奥の間にひっこんだままであった。

展示場では、来館者は中庭の方から女性の部屋をのぞいてみることができる。手前には湯沸かし用のかまどがある。その奥のステップから現地では靴をぬいであがる部屋の中に、色あざやかな布や、日本のこたつと同じく卓の下に炭をいれて利用する暖房器具「サンダル」が見える。水差しなどの食器が飾られた壁のくぼみは、大型の家具のかわりに生活用具を収める場所として使われていた。部屋の向かって左側、仕事場としてつかう「アイヴァン」とよばれるテラスには、糸車、ゆりかご「ベシク」が展示されている。ブリキ細工でおおわれた木箱「スンドゥク」は、嫁入り道具として女性が身の回りの品々を詰め込んで持参したものである。

この展示資料の民族名にはウズベクとあるが、トルコ系のウズベク人、ペルシア系のタジク人の別なく、二〇世紀初頭のオアシス都市に住む裕福な家庭の生活様式をあらわしているといえる。当時は「民族」の意識はそれほど強くなく、どちらかというとサマルカンドやブハラという都市に結びついた「サマルカンド人」「ブハラ人」などの認識がもたれていたという。